



ピッポ新聞

2010
9
No.251

子どもの本専門店

編集・発行 伊藤俊男

ピッポ

〒424-0886 静岡市清水区草薙1-6-3
TEL & FAX 054-345-5460

URL <http://www.pippo.co.jp>
E-mail itoh@pippo.co.jp

『シートン動物記』 今泉吉晴氏の新訳

1890年代の後半アメリカで出版されて以来『シートン動物記』は、広く世界中の子どもたちに親しまれてきた動物物語です。

(多くの雑誌や「Wild Animals - Have known」などに作品を掲載。まとまって『シートン動物記』として出版されたわけではない)

この『シートン動物記』は、わが国では1935年、内山賢次によって翻訳されたのが最初です。それ以前日本以外においては、すでに各地で翻訳され、ロシアのビアンキなどナチュラリストや博物学者などに評価されていました。わが国でも内山氏以来、こんにちまでさまざま



『童心社版シートン動物記最新刊の『子グマのジョニー』』

な出版社からさまざまなお知らせが出てきました。しかしながら、これまでその作品世界やシートン像については、正しく理解され、評価

されたうえで出版されてきたとは、必ずしもいきりません。そんな中、新しい訳が今泉吉晴氏によって童心社から出版されました(既刊6巻以下刊行中)。
今号では、この今泉氏の『シートン動物記』の新訳について紹介したいと思います。

今泉氏のピッポ新聞15回の 連載と『シートン動物記』

今泉氏の新訳を取り上げる理由は、いくつかあります。ご存知のように、今泉氏はこのピッポ新聞に15回に渡って「ビアンキの名作『くちばし』」二つの版の謎を解く」と題して福音館書店から出されたビアンキなどの田中友子氏訳の『くちばし どれが一番りっぱ?』『どうぐはなくて』『おしゃべりなもり』(N・スラトコフ他)の3冊を中心に批評を展開しました。そして版元である福音館書店には数々の疑問や問題を提起してきました。当然版元は読者の疑問や科学的誤りの指摘に対して、反論や、誤りの内容の訂正(科学絵本であるならば特に必要なこと)などで答えるべきなのに、残念ながら福音館書店はこれらを無視し、なおかつ『おしゃべりなもり』はこの7月に品切れにしましたが、『くちばし どれが一番りっぱ?』『どうぐはなくて』の2冊は売り続けています。

しかしながら、福音館書店がいかに無視し続けようが、この今泉氏の15回の連載は、田中友子氏の訳した絵本の世界からは、決して到達することができなかった、ビアンキの作品世界の深

さと素晴らしさにわたしたちを導いてくれました。

このことこそが、15回の連載で一番意義あることだったのです。すなわち、翻訳とはただ原書の言語を日本語に置き換えればいいのではなく、その著者の世界(その著者の生きた社会や世界観など)を知り、その内容に共感したうえで、作者の本来持っている作品レベルに読者を導いてくれることなのです。さらにそれが科学的な知識を含むものであるならば、事実や科学的知識をしつかり把握してこそ、その作品世界を伝えることができるというものです。

つまり、今泉氏はビアンキ作品を田中友子氏とは違う訳(解釈)を示すことで、翻訳とはどんなものなのかを示唆してくれたのだと思います。

手前味噌になりますが、もしあなたが未だに福音館書店の田中友子氏訳のビアンキの絵本だけしか知らないのであれば、「ピッポ新聞」の1年半に渡った今泉氏のこの連載をお読みなることをおすすめいたします。そこには、田中友子氏の訳(福音館の絵本)では味わえなかったビアンキの本当の世界があるからです。(この15回の連載は、今でもピッポのホームページに掲載中ですから、どなたにもお読みいただけます。)

ちよつと横道に逸れますが、この原稿を書き始めた8月29日の日曜日、東京からピッポに訪問客がありました。この方は半年以上前に当店からネットで古書を買

入した折り、本の中にピッポ新聞が同封されていたので、ピッポのホームページからこの今泉さんの連載を改めて1〜15回まで読んで共感し、ちよつと静岡に来る機会にと奥様と寄つてくれたのです。東京の現役の小学校の校長先生だということでしたが、シートンのことや今泉さんのことなどお話しできて、ぼくもとても嬉しかったです。

さて、15回の連載を身近で見えてきたばかりは、今泉氏がいかに多くの文献や原書に当たった上で執筆しているかを垣間見ることができました。時には数行の書き改めに数時間も費やすこともありました。たかが子どもの本屋のPR紙だというのに、見くびった所などいささかもありませんでした。学者とは(というより、今泉氏の人間性だと思えますが)こういうものかと、その姿勢に敬服した次第です。その姿勢は今度のシートン動物記でもいかに発揮されています。

今泉氏の新訳『シートン動物記』はなぜ面白いのか

今泉氏は動物学者です。自身の研究(野ネズミやモグラなど野生の小動物)をフィールド中心に続けるかたわら、米国のナチュラリストのソローやシートンを研究して、その著作の翻訳や評伝をあらたな視点で執

筆してきました。

特にシートンについては、これまで『シートン動物誌』(全12巻・紀伊国屋書店 1997年〜8年)を出版し、続いて、2002年に『子どもに愛されたナチュラリスト シートン』(福音館書店)を出版し、さらに福音館書店からは『シートン動物記』(2003年〜2006年9冊。これは現在今泉氏が著作権を引き上げ絶版)をだし、そして今年、童心社から『シートン動物記』(進行中)を新訳で出しています。

ここで特筆すべきは、福音館版の自身の訳よりもさらに進化していることです。

『オオカミ王 ロボ』に例をとってみましょう

福音館書店版では『カランポーのオオカミ王 ロボ』となつていますが、童心社版は『オオカミ王 ロボ』です。タイトルばかりか、目次表現も少しづつ違っています。もちろん本文も多くの言葉や表現にさらなる推敲の後を感じます。どちらかといえば、福音館版より童心社版のほうが簡潔な表現になつているようです。単純に前訳と表現が違うことが、良いというつもりは毛頭ありません。

ぼくが童心社版を読み出して一番に気になつた点は、今泉氏の福音館版を含め、これまで『オオカミ王 ロボ』の訳者の多くが、ロボの住み暮らした地域名を「カランポー」と訳していたのに、今度の訳ではそれが「クルンパ」となつていたことです。

それまで「カランポー」という地名に慣れていたものだから「クルンパ」は最初違和を感じたのです。

「カランポー」と「クルンパ」は似ているから、スペルの読替かと思いい、それだつたら「カランポー」の方がいいのではないかと思います。

「これはどういうことだろうか？」

一方では、今泉氏のことだから何かあるのだろうとは思ったのです。そして、やはり「何か」あったのです。

巻末に「ムササビ先生と読む『オオカミ王 口ボ』」（この童心社版には各巻末ごとに「ムササビ先生と読む『口ボ』」という項目があり、その2番目に「クルンパってどういう意味？」という2頁に渡って「クルンパ」についての説明がありました。

「クルンパ」は先住民族が川の名前として、また高原や地域の名前として使っていたということです。「奥地」という意味の、先住民族の言葉の発音に合わせて英語表記されたので、スペルもいろいろでした。しかし現地地で調べた結果、発音は「カランポー」ではなく「クルンパ」のカタカナ表記のほうがよい、と改めたそうです。

この「クルンパってどういう意味？」の中にこんな個所があります。

・・・つまり、発音がカランポーでいいのだろうか、と疑問をもちました。

そこでわたしはニューメキシコをおとずれ、クルンパ川をみて地元の人にきき、その地域の博物館をであるクレイトン博

物館をおとずれてきき、そして郡役所でくわしい地図をみせてもらって、調べました。

わかったことは、このことははもともと英語ではなく、先住民族がつけた川の名の表記であることです……。

どうです！ここに今泉氏の訳に対する姿勢が凝縮しているとおもいませんか。

「カランポー」はすでに定着している表記ですが、自身を含めたこれまでの訳に拘泥するのではなく、疑問に思えば現地まで出かけて調べ、読者により正しく伝えようとする姿勢が見えます。このようなことは今泉訳の『シートン動物記』には満載されているのです。だから面白いのです。

新訳の特徴の一つ

ムササビ先生と読む『

今度の童心社版『シートン動物記』のもう一つの大きな特徴は、この巻末にある、「ムササビ先生と読む『口ボ』」です。これはムササビ先生（今泉氏）が文中の疑問について、読者である子どもに答えるという設定で書かれています。

これは良くある文中の単なる言葉の説明ではなく、ある場合には、物語の十分な背景説明であり、時には一つの読み物（これはぼくの解釈）だったりします。そのくらい興味をそその内容に満ちています。

これを読んでいくと、シートンの生きていたアメリカがどんな時代であったか、そ

こでは人はどんな暮らしをして、どんな考えだったか自然に理解できるのです。それで、物語の楽しさや理解も深まるというものです。

例に取りあげたこの『オオカミ王 口ボ』は総ページ数175頁のうち物語の部分が、102頁で、「ムササビ先生と読む『オオカミ王 口ボ』」の部分が71頁です。全体の三分の一以上を占めているわけですから、訳者の今泉氏がいかにこの部分に力を入れているかが分かります。また、読む価値もあります。

もつとも、すべてが三分の一以上というわけではありません。中には『銀ギツネのドミノ』のように本文222頁で説明22頁というのや『わたしの愛犬ビンゴ』のように、本文96頁、説明62頁という長いのもあります。

さて、この『シートン動物記』は全15巻まで続くと言つことですから楽しみます。

既刊の本は

『オオカミ王口ボ』（1155円）

『わたしの愛犬ビンゴ』（1155円）

『銀ギツネのドミノ』（1365円）

『ワタオウサギのラグ』（1155円）

『リスのバナーテイル』（1365円）

『子グマのジヨニー』（1155円）

『野生のヒツジクラグ』（9月刊行予定）

『シートン動物記』をこれまで読んだことのある人もない人も、今泉氏の新訳をぜひ読んでみてください。

ねー、この本読んだ

『どうぐでなにがつくれるの?』(マレーク・ベロニカ・文と絵 マンディ・ハシモト・レナ・訳 風濤社 1470円)
 子どもは大人の真似をして、「ごっこあそび」



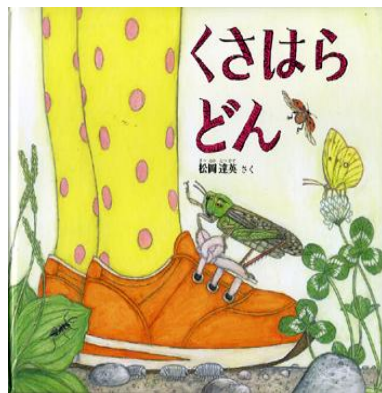
が大好きです。それに、子どもは大人の真似をして育つ必要があるのです。でも、時には身近にある本物の道具を使ってものを作ることだって大切です。それには、この絵本のように、おとうさんやお母さんが、使い方を教えたり、危険を指摘したりしながら体験することです。この絵本は子どもと道具と大人の役割がとても良く描かれています。



『ちいさなおおさま』(三浦太郎・作 偕成社 1260円)
 ちいさなおおさまは自分が小さいために日常生活

活で困ったり、寂しい思いをしています。そこに大きなお姫様がお嫁に來ました。子どもがたくさん生まれ、小さな王様は困ることも、寂しいこともありませんでした。丸や三角や四角などやカラーージュの手法も使って、デホルメした絵が楽しい。

『くさはらどん』(松岡達英・作 福音館書店 840円)
 9月に入りましたが、まだまだ暑い!野原



や、林や、河原にはセミや、チョウやトンボやバッタはまだいるのだから?それとも知らない間に秋の虫たちに主役が交代したのかな?

くさはらにでて、きみも「どん」って足を踏みならしてごらん。そしたらわかるかもしれないよ。「チンチロリン」なんて声かきこえるかもね。

かがくのとも創刊号〜50号(全50冊)複製 (福音館書店)
 * 十月上旬 * 34650円(分売不可) 予約受付中!

今月の古書あれこれ

今号からこの欄で、古書についてのあれこれを書いていきたいと思えます。以前にも書きましたが、古本屋の本の仕入のルートは、市場で買う場合と、個人からの場合が一番多いわけです。ほくも仕入の九八パーセントはこの二つです。で、神田の場合はJRを使うことが多いですが、出品が沢山あるときは車ででかけます。他の市場に行くにも、個人宅に買い取りに出かけるのにも車です。ところが、ぼくが乗っているのは軽4ですから、時々車に積み切れません。先日の買い取りはダンボール箱が五十箱を越え、売ってくれたお宅を4往復もしました。たまたま倉庫に近かったのでまだよかったです。車がひしゃげる感じでした。そこで思い切って車を買うことにしました。オークション代行を通して中古のオークション市場で日産のパネットバンというのを手にいれました。走行距離5万4千キロ、内部に傷あり。でも軽4に較べてデカイぞ!車は四七万円でしたが、なにやかやと結局七十万円を超えてしまいました。カミさんの怒ったこと。さてさて、この代金を取り返すには、古書をどれだけ売らなければならぬだろうか?そこでみなさまにお願いです。古書売ってください。例え東京でも神奈川でもかまいません。お知り合いも紹介ください。パネットバンでしょうかいいます。